

# まど・みちおの斬新さ

菊永 謙

まど・みちおは、たくさんの幼児童謡、子どもの歌、詩を残してくれた。彼の大きな功績は幼児童謡の確立にあるのだろう。子どもたちが、誰が作詞し誰が作曲したのかも知らずに、ふとした時に口ずさむ歌々。あるいは、母親が子どもとほほえみながら歌い始めている数々の歌。そのいくつかが「ぞうさん」を始めとしたまど・みちおの幼児童謡や子どもの歌である。童謡詩人の大きな喜びは、世代を越えて親子代々に口ずさまれるところにあるのだろう。まどの残したものは、童謡ばかりではない。子どもにも大人にも読み味わうことのできる多くの詩も残してくれている。子どもたちの読む詩——少年詩の書き手たちにも大きな影響を与えている。また、まど・みちおは自らの詩の世界を掘り下げていくなかで、現代詩の世界においても一つの大きな風穴をあけたといえる。難解な詩があふれるなかで、おもしろく、たのしく、なお、わかりやすくも深い問い掛けを静かにこだまさせる詩を人々に差し出してくれている。現代詩人たちの間にあっても、まどは同時代人の阪田寛夫

と共に、広く詩の持つ本来的な意味を問い直す一定の働きをなした詩人でもあった。まど・みちおの切り拓いたことばの世界、詩の広がりや深まりについて、いくつかの作品を紹介しながら読み直してみたく思う。

## 1 短詩・事物詩の魅力

まど・みちおのたくさんの詩作品にあつて最も印象に残り、後続の七〇年代以降の詩の書き手たちにも何らかのインパクトや影響を与えたのは事物詩と称せられる短詩の諸作といえよう。事物詩の代表的な作品で一九六九年初出の「するめ」を引いてみよう。

### するめ

とうとう  
やじるしに  
なつて  
きいている